

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム 部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 80 Mar. 2014

FIELD NOTE

no. 80 Mar.

特 集

都 留 時 間

通いつめたパン屋さん

話をしに行くお店

都留のおやつ

また行きたいと思うケーキ屋さん

羽野さんの道しるべ

フィールド・ミュージアムのたのしみ第23回①

夜の森が楽しいわけ



FIELD・NOTE

No.80 Mar. 2014

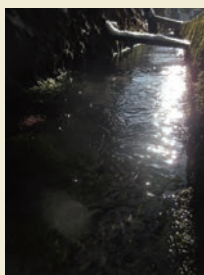
04 ー特集ー 都留時間

- 06 通いつめたパン屋さん
- 10 話をしに行くお店
- 12 コラム 生きものそれぞれの時間
- 13 都留のおやつ
また行きたいと思うケーキ屋さん
- 16 羽野さんの道しるべ
- 18 フィールドミュージアムのたのしみ 第23回①
夜の森が楽しいわけ
- 20 おわりに

-
- 22 記憶が描き出す一本の道 大学周辺の街の前史
 - 26 起き上がる朝
最終回 ー教育のなかでの人との関わりー
拝啓 遠藤先生
 - 32 フィールド暦
 - 33 センサーカメラが写した動物たち
 - 34 フィールドミュージアムのたのしみ 第23回②
のちの疑問に答えるメモ
 - 36 ふくらすずめの越冬
 - 38 冬芽と待つ春
 - 40 11周年企画 時の歩みかた
 - 42 富士道を歩く 2013 最終回
 - 44 Field・Note News
 - 46 編集後記

表紙写真 (2014.02.05 撮影)
「雪解けの水路」

「中屋敷フィールド」に向かう途中の十日市場の水路です。雪解けで水かさが心もち増しているようでした。水路の脇には、三つ又の枝に刺したまゆだんごがお供えしてありました。(別符沙都樹=写真)



『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。



特集

都留時間

どこでなにをしていますが、時間は流れています。

忘れていてもいつも傍らにある、時間。

自分の見えないところで

あの人は、あの生きものたちは、なにをしているのだろう。



それぞれの暮らしや生活のリズムによって
時間のすごしかたはさまざまです。

でも、ふだんの私たちは

自分のすごす時間ばかりを考えがちです。

それに気づいたとき、

自分以外はどんな時間をすごしているのか知りたくなりました。

都留に流れる時間

私たちはそれを「都留時間」と名づけ

そこで起きていること、それぞれのすごしかたに焦点をあてました。



通いつめたパン屋さん

都留に越してきたばかりのころ、近所を散策しているときに見つけたお店「Baleine」^{バレエヌ}。最初はなんのお店かわからなかったが、窓の説明書きを読んでパン屋であることと、週に2日しか営業していないことを知った。どうして週に2日しかやっていないのだろう。どんなパンが売られているのだろう。気になったわたしはさっそくつぎの営業日にお店を訪れた。

舟田早帆（社会学科1年）＝文・写真





左：パン同様「スコーン」も天然酵母で作られている

右：お話を聞かせていただいた作業台。店内の様様替えをしたため、今はパンを置くために使われている

お 店に入ると女性が二人、「いらつしや
いませ」と笑顔で迎えてくれた。何

を買おうか迷っていると、作業をしていた女
性が「わからない商品があったら気軽に聞い
てくださいね」と優しく話しかけてくれる。
都留に来たばかりで心細かったわたしの気持
ちが少し安らいだ。

そのかたにオススメを聞いて、生ハムの
ベーグルサンドを注文すると、その場で作っ
てくれた。それを買って家に帰り、ワクワク
しながらわたしはベーグルサンドにかぶりつ
いた。パンはもちつとして噛みごたえがある。
噛んでいると口のなかに小麦の甘さがじんわ
りと広がり、飲み込んだあと甘さが喉のあ
たりに残る。食べ終わると満ち足りた気持ち
になった。美味しかった、また食べたい。ま
たこのお店に行きたい。そう思ってから、わ
たしは何度も、店員さんに顔を覚えられるく
らいお店に通った。

何度も行っただけで、わたしの知らな
い時間に「Baileine」ではどんなことが起こつ
ているのだろう。お話を聞いてみたくなった。
1月24日、12時30分ごろに「Baileine」を
訪れる。入り口の扉には「CLOSED」の札

がかけられている。入ってもいいのか、わた
しが窓越しにようすをうかがっていると、お
店の奥から女性が現れ「ごめんねえ」と言い
ながら、扉を開けてくれた。紺色の帽子が
トレードマークのこのかたは武井雅子さん
(42)。「Baileine」の店主で、お店で売られ
るパンは武井さんが作っている。はじめてお
店に入ったとき、ベーグルサンドを作ってく
れたのも武井さんだ。

閉店後のお店は商品が並んでいないから
か、営業時の明るい雰囲気とは違い、少し寂
しい印象を受けた。お店に入って右手にある
作業台を挟んでお話をさせていただくことに
なった。

ゆったりと過ごせるお店

今はパン屋として営業している「Baileine」
だが、以前は武井さんがご夫婦で経営してい
たレストランだったそうだ。「もう（レストラ
ンを）やめてから5年くらい経っちゃうのか
な」と武井さんが懐かしむように話してくれ
る。当時、雅子さんはパンとデザートを作る
担当をされていた。定休日にはパン教室を開
いたり、パンの予約販売や配達をおこなった

りもしていたという。レストランをやめてからも教室とパンの配達は3年ほど続けていたが、配達に手が回らなくなったためパン屋としてお店を構えることにしたそう。パン屋としての「Baleine」しか知らなかったわたしは、そんな経緯があったことに驚いた。

お店はレストランとして営業していた場所をそのまま使っていて、内装もほとんど変えていないそう。そう聞いてから改めて店内を見ると、お店の奥にある木製のカウンターは高めでパン屋よりもレストランで使われそうなものと気づいた。店名の「Baleine」はフランス語でクジラという意味。クジラのようにゆったりとした時間を過ごしてほしい、と旦那さんがつけた名前をレストラン時代から引き継いでいるそう。

わたしは「Baleine」に来ると、つい長居をしてしまう。何を買うか決めるにも時間をかけてみたり、武井さんやほかの店員さんと世間話をしたり。そうして「Baleine」で過ごす時間が好きで、何度も足を運びたくなる。たしかにここに来た時はゆったりと時間を過ごせていたな、と店名の由来を聞いて思い返した。

週2日営業の謎

現在「Baleine」が営業しているのは毎週火曜日と金曜日。開店時間も閉店時間もはっきりと決まっていない。武井さんがいるとお店は営業中ということになり、パンが売り切れればしまえばその日の営業は終了だ。お客さんが買いにくる時間に合わせて融通が利くようにやっている、と武井さんはおっしゃっていた。

営業日はだいたい朝の3時半くらいから開店の準備を始めるという。パン屋は朝早くから働いているイメージがあつたけれど、数字にして教えてもらおうと仕事の大変さがよくわかる。パン生地をこねたり焼いたりして、最初に焼いたパンが完成するのは朝の7時くらい。9時ごろにはほぼすべてのパンが焼きあがるそう。

しかし、それだけ早い時間から準備をしても、当日だけでできることには限界があるという。「Baleine」で売られるパンの多くに使われる天然酵母は、発酵させるのに2、3日はかかってしまうそう。どうして週に2日しか営業しないのか、お店の存在を知っ

たときから不思議に思っていたけれど、営業していない日は武井さんが美味しいパンを作るための準備期間だったのだ。

武井雅子さんという人

「作るのが好きだから。やっぱりなんでも作ってみたいくなるんですね」と武井さんはおっしゃった。聞くと「Baleine」で出しているものは基本的に武井さんが作っているのだという。パンと一緒にお店で売られているジャムも、サンドに使われるマヨネーズも武井さんの手作りなのだそう。美味しいものを追究するだけなら、買ってしまえば済むことだと思っていた。それをわざわざ作ってしまうなんて、好きでなければできないことのように思う。

思い返すと、わたしが昨年の秋に売られていた栗のパイが美味しかったと感想をお伝えしたときには、あれは栗がたくさん手に入ってから作ったんだけど、と武井さんは嬉しそうに説明をしてくださった。食べものにかかわる話をしているときの武井さんは声のトーンが少し高くなり、とても楽しそう。聞いているわたしまで楽しくなり、もっ



左上：サンドにもよく使われる「リュスティックブレーン」 右上：写真左側にあるカウンターはレストランを営業していたころから使われている 左下：ジャムを使ったサンドも作ってくれる 右下：レストラン時代からお店を出されている「バレーヌパン」

と武井さんの話を聞きたくなる。それは武井さんが好きなことについて話してくれていたからなのだろう。

わたしがお店を知ってから、1年が経とうとしている。毎週のように「Baleine」に通い、そのたびに武井さんとは顔を合わせていた。それまでの私のなかの武井さんのイメージは、優しくて美味しいパンを作る人。お話をした今でもその印象は変わらない。けれどそれだけではなく、好きなことへの熱意を内に秘めていた。知らなかった一面だけど、それも武井さんの一面であることに変わりのない。わたしが知らなかった時間の「Baleine」を通して、作ることが大好きな武井雅子さんという一人の女性とわたしは出会った。

そんな武井さんの一面を知った今はパンを買いに行くだけでなく、武井さんに会いにお店に行きたいと思う。美味しいものを食べたらこんなものがあつたと武井さんに伝えたい。武井さんからもっと食べものの話を聞いてみたい。お店に行きたい理由が新しく増え、わたしは「Baleine」に通うのがいつも楽しみになったのだ。

をしに 行くお店



メニューの書かれた黄色い紙が窓いっぱい貼られている

昼食を食べに友達と出かける。しかし、時刻は14時になっており、飲食店は準備中の看板ばかり。谷村町駅前に来てやつのことで営業しているお店を見つけた。ここでお昼を食べようと、お店に入ることにした。

廣瀬はづ紀（社会学科2年） 文・写真

おばちゃんとの出会い

私たちが入ったお店は「たこ焼き屋ひらい」。扉を開けるとまず4人がけのテーブル席が目に入る。左側を見ると、大きな調理スペースがあり、そこには屋台でよく目にする鉄板やたこ焼き機が置いてある。その手前は、カウンター席になっていて、数人分の椅子が並んでいる。

エプロンをしたおばちゃんが「いらつしやい」ときはきした声でいう。私たちはカウンター席に座り、注文したお好み焼きを待っていた。すると、常連らしきお客さんが店内に入ってきて、おばちゃんと体調や近所のことを話し始めた。しばらくすると、頼んでいたお好み焼きが出来上がり、おばちゃんがこちらに持ってくる。そのときに「文大生？」と話しかけてくれて、大学生活について話をした。それから、私の地元のことやこのお店のことなど、気づいたら話が弾んでいた。

私は飲食店でご飯を食べたときの帰り道にたいてい「おなかいっぱい」、「おいしかったな。また行きたいな」というふうに思う。だけど、「たこ焼き屋ひらい」から帰るときに

は「またおばちゃんと話がしたいな。もっと話が聞きたいな」と思っていた。このことがすごく印象的だったけれど、それがなぜだったのかそのときはわからなかった。

再び「たこ焼き屋ひらい」へ

お店を出るころには、まるで以前から知り合いだったかのように、私とおばちゃんは親しくなっていた。人見知りの私は初対面の人ましてやお店の人と打ち解けることはあまりなかった。だから、おばちゃんのような人に出会えたことは新鮮だった。

おばちゃんが楽しいと感じるのはいつだろう。おばちゃんがお客さんと過ごす時間を楽しく感じていて、それがお客さんにも楽しく感じさせているのではないか。もっと詳しく話せば、なぜ惹かれたのかということも、わかるのかもしれない。そう思い、再び「たこ焼き屋ひらい」へと足を運ぶことにした。

「たこ焼き屋ひらい」を経営しているのは伊藤千代子さん。私をはじめ、多くのお客さんから「おばちゃん」と呼ばれ、親しまれている。

「たこ焼き屋ひらい」は、おばちゃんのお



テーブル席にいるお客さんと話すおばちゃん

母さんが本学近くの踏切沿いにプレハブ小屋を建てて始めたそうだ。それから2、3年はその場所で経営していたが、もともと営業したいと思っていた今の場所にお店を移した。現在の場所で営業するようになってから、今年で20年目になる。

話す時間

おばちゃんに楽しいと感じる時間について尋ねると「仲間（同級生）と過ごす時間だね」と返ってきた。お話を聞いていると、お客さんとのやりとりではなく、自分の長年の友達と過ごす時間を楽しく思っているという。そ

の答えは私が考えていたこととは違っていて、少し意外だった。

「話したくてくるんだよね」。お客さんの多くは買ったたり食べたたりすることより、おばちゃんと話をするためにお店に来る。思い返してみると、私がはじめてお店を訪れたさい、おばちゃんは自らお客さんに話しかけるようにしているといっていた。その心遣いがお客さんに話をしたいと感じさせ、お店へと足を運ばせるのだろう。

お店を訪ねると、おばちゃんはよく卒業した学生のことを教えてくれる。そのときのようすは、まるで我が子のことを話すよう。学



お店の名前にも入っているたこ焼き（1箱12個入りで340円）。お店の一番人気だそう

校を卒業するとき、今後のことを報告していく学生の姿が目につかぶ。私が「いろんな人と交流あるのついでいいですね」というと、遠くからわざわざおばちゃんに会いに来たという人や近所に住んでいる人など、さまざまなお客さんが来ることを話してくれた。いろんなお客さんがいて、いろんな話を聞けるのがいいよね、とおばちゃんはうれしそうに語る。一人ひとりのお客さんに向き合って話しているようすがそこから感じられた。

食えることより話すことがメインになるお店、それが「たこ焼き屋ひらい」だ。お客さんに対してというより、一個人として話をしてくれる。そんなおばちゃんがいるから、私はこのお店に惹かれたのだ。

生きもの それぞれの 時間

人によっても違うでしょうが、睡眠を除く人間の活動時間は1日16〜18時間くらいだと思います。この時間にやることは、学校に行ったり、仕事をしたり、食事をするなどが多くの人に共通することでしょう。つまり、人間の1日は24時間で、それに合わせて生活を組み立てています。しかし、野生動物のなかには、人間の活動周期とはちよつと異なるものがあります。たとえば、地下で生活をしているモグラ。アズマモグラは4時間活動して、4時間休息すると言われています。人間もモグラも同じ哺乳類ですが、住んでいる環境が違っているためか、このような差異が生じて

います。

寿命はどうでしょうか。一般的には

サイズが大きいほど、長く生きるこ

とが知られています。たとえば植物では、

1年で枯れてしまう一年

草と数百年も生きる樹木で

は、大きさと寿命の関係は一目瞭

然です。いっぽう昆虫では、カブトムシの

成虫の寿命は数ヶ月ですが、オオクワガタは数年です。この両種は同じような大きさ

ですが、寿命はかなり違っています。

四季の訪れの感じかたもいろいろあります。

現代の人間はカレンダーから知ることがほとんどだと思いますが、チョウのなかには、ある温度よりも高い日が何日間あると、

孵化^{ふか}したり、羽化したりするものがあります。渡り鳥の場合は、日照時間の変化によって、

渡る時期を知ります。



上：日本には冬鳥として渡来するジョウビタキ。3月中旬から4月にかけて、繁殖地であるロシアを目指して日本を旅立つ



左：モンシロチョウ。モンシロチョウの幼虫は、休眠^{きゅうみんさなぎ}繭になるか、休眠をせず^{きゅうみんさなぎ}にすぐ羽化をする繭になるかは、温度で決まるという

私たちは、自分のもっている時間感覚（24時間や1年）からさまざまなものを長い、短いと考えます。自分と他者の違いを推し量るときは、何か基準が必要になるかもしれないが、その違いがなぜ生まれるのかを想像するのは楽しいものです。

（西教生）



都留のおやつ

また行きたいと思う ケーキ屋さん

あったかいお茶と美味しいお菓子で

ほっと一息つくとなんだか幸せな気分になる。

美味しいお菓子が食べたい。

そう思って街に出た。

私が見つけたのは「ジョージワシントン」と
いう一軒のケーキ屋さん。

加藤萌香（初等教育学科1年） 文・写真



①左から奥さんの喜美江さん、息子の宗博さん、オーナーの昭博さん。店内ショーケース横にて
②ケーキは季節限定のものから定番のものまでさまざま
③店内は隠れ家のように居心地がいいとお客さんに評判
④色とりどりのケーキの写真が大きく掲げられた外観が「ジョージワシントン」の目印

ゆつくりと開けたドアのむこうは、外から見ると天井が高く広々としている。木製の壁のあたたかみがんとも心地よい。店内は薄手のコートを着て丁度いいぐらいの温度で春先のような。思わずわくわくするような、そんな出会いの季節を思わせてくれる。雰囲気がいいなと思いつつ、向かって左手にあるショーケースに目をやる。そこは私の今まで入ったことのあるケーキ屋さんとは一味違っていた。

というのも、どのケーキも種類ごとに一個か二個しか置いていない。どうしてなんだろう。すごく人気でほとんど売れてしまったのかな、と考えているとショーケースの横の扉から、鮮やかな青色のバンダナを巻いた少し小柄な女性が出てきた。ニコリと微笑み「いらっしやいませ」ときちんと目を合わせて声をかけてくださる。

私はケーキ屋さんという気難しそうなパティシエがいるイメージを抱いていたから、お店に入るときはいつも少し緊張する。でもその女性は気取ったとつつきにくさはなく、気さくに接してくださった。優しいなかつたよかったです、と安心してもう一度ショーケースに目

を向ける。一番に目を引いたのは、つややかな丸い白地にサクラ色のソースとブルーベリーが一粒上品にのった「レーヌ」というケーキ。宝石みたいにきれいで見とれてしまった。その日は持ち合わせの都合でシュークリームを買って帰ったけれど、また来たいなと思った。店内もお店のかたもいい雰囲気。そういうお店からの帰り道はとても心が満ち足りた気分になって、足取りが軽くなる。ショーケースに並んでいたきれいなケーキたち。「ジョージワシントン」とはどんなお店なんだろうと知りたくなり、後日お話を聞きに訪れた。

こだわったからこそ選択

私がお話をうかがったのはオーナーの中村昭博さん（63）。妻の喜美江さん（58）と息子の宗博さん（34）の3人でお店を切り盛りしている。

夕暮れどき、店内の窓側に置かれているテーブルに向かい合うかたちでお話を聞く。

昭博さんは昔、東京でシェフとして働いていた。喜美江さんとの結婚を機に山梨に来たそう。都留にお店を構える前は忍野村でケーキの工場を営み、卸売りを専門にしてい

たという。当時ケーキ作りは職人に任せていたが、納得のいくものを作りたいという思いから自身でケーキを作り始めた。そういう経緯を経て、現在の場所です「ジョージワシントン」を営んでいる。

一番気になっていた、ショーケースにケーキを一個か二個しか並べない理由をうかがった。昭博さんは顎に軽く手を添えながら、「やっぱり傷むんですよ。直射日光や湿度の関係とかもあるしね。やっぱりいい状態で食べてもらいたいってのもあるし」とショーケースに目をやりつつ、おっしゃった。長時間日光に当たっていない新鮮なものをお客さんに渡すために、そのつど新しいものを厨房の冷蔵庫から出している。お店に入ったときに感じたあの春先に似た低めの温度設定は、ケーキが傷まないための配慮のひとつだったのだ。

またあなたと会いたい

初めてお店に来たときのことを振り返り、「喜美江さんの印象がすごくよかったです」とお話した。すると昭博さんはそんな大げさなと笑いながら「一流の店なんだぞって顔されたら嫌じゃん。ありがとうございました」

て言って終わっちゃうのは嫌だから、ありがとうございます。そういうことは話すね、よく家内と。やっぱりまた来てほしいから」と接客のこだわりについてお話してくださった。

私もアルバイト先で接客をしているが、語尾の違ひなんて気にかけたことはほとんどなかった。けれど中村さんたちはたつた一言にまでこだわりの、またあなたと会いたいという思いをこめて「ありがとうございます」と言っている。そのちいさな語尾の違ひは、お客さんとの繋がりを大切にする思いから生まれたものだと分かった。

また来たいと思うのは

お話のなかで昭博さんはケーキ屋なんだからケーキが美味しいのは当たり前、だから接客での一言や管理の方法にまで気を配っている、と自信をもった表情でおっしゃっていた。その思いの表れが手間をかけた管理や「ありがとうございます」の一言だ。根底には、自分の店を選んで来てくれるお客さんを大切にしたいという思いがある。

昭博さんは「人と人との繋がりがあって、できると非常に良いよね」とおっしゃった。繋

がりを大切にしたいという思いが「また来たい」と思うお店を創っていたのだ。

* * *

お話を聞いた後日、再びお店を訪れ、ケーキを食べた。ザッハトルテに無加糖クリームをのせてゆつくりと味わう。純粹に、本当にこのケーキは美味しいなあと思った。昭博さんの言葉を思い返しながら一口ひとくちを噛みしめるとさらに美味しい。作り手の思いを知った後に食べるケーキはいつもの何倍も美味しかった。

「こだわりや思いを知ってから食べる」「おやつの時間」は、いつもよりずっと幸せな気分になることができる。

ケーキの ジョージワシントン

工場・ショップ
都留市上谷 5-6-1

TEL
0554-45-4260

インターネットショップ
<http://www.tanjoubi.jp>

定休日
不定休



羽野さんの道しるべ

ふだん自然とのかかわりが少ない私は、自然と
かかわって生きる人がどんな時間をすごしてい
るか知りたいと思った。そこで自然にかかわる
人にお話を聞くべく、宝地区で田畑を作ってい
る羽野^{はの}幸さん（30）にお会いした。

伊藤瑠依（社会学科1年） 文・写真

「明日寿命が来ても、後悔しないように生
きていたいな、っていうのはあって」。少し
の沈黙のあと、考えた言葉をそのまま話すよ
うにしてすらすると羽野さんは言った。これ
は、羽野さんに大切な時間をうかがったとき、
時間という概念とは合わないかもしれないけ
れど、と言いながら答えてくれた言葉だ。こ
の言葉が私のなかでとても印象的だった。

私が羽野さんと出会ったのは、昨年の秋。
稲刈りのお手伝いのお誘いを受け、参加さ
せてもらったのがきっかけだ。ほっそりと
していて華奢な体つきだけれど、その見た
目とは異なり、軽々と一輪車を動かす姿が
魅力的な女性だった。現在羽野さんは、宝
地区で野菜を中心としたさまざまな作物を
作っている。けれど、農業を初めてからし
ていたわけではなかった。

農業をはじめるときまで

大学の卒業生である羽野さんは、大学4
年生のときに大きな選択に迫られる。地元
企業に就職するか、都留に残るかだ。さま
ざまな人と出会い、自然豊かなこの土地で
すごした大学時代は羽野さんにとって、と

でも思い入れのある時間だった。都留には思い出がぎつしり詰まっていたと羽野さんは言う。悩みに悩んだそうだが、経済的に自立したいという考えから内定が決まっていた会社へ就職した。

しかし、都留で生活がしたいという思いが消えることはなかった。だから企業に勤めて3年後に仕事を辞め、都留に戻ってきた。その後約2年間、農業の研修を経て、2012年に農家として独立し、今の生活をしている。この選択にこそ、羽野さんの後悔しないように生きていたいという気持ちが表れていた。企業に就職するか都留に残るかという選択、企業をいつ辞めるかという選択。どちらも、後悔しないように生きていたいという思いが先を決める道しるべとなったのだろう。

お話を聞いて、自分は優柔不断なのでそういった選択のしかたはいいですね、と思ったことを伝えた。すると、私も優柔不断だよ、うじうじだよ、でもそういうときは人に相談しながら決めればいい、と笑いながら言ってくれた。後悔しないように生きようと考えられる羽野さんは、そんな考えすら持てない私

にとつては手の届かないところにいる人のように思っていた。けれど、ありのままの自分を言う姿を見ると、決してかけ離れた存在ではないのだと思えた。

羽野さんの今

こうして農業に携わるようになった羽野さん。今はどのような生活を送っているのか知るため1日のサイクルを尋ねてみた。すると羽野さんからいつの時期ですか、と逆に尋ねられてしまった。羽野さんの生活のリズムは季節によつて時間が大きく変わっていたのだ。

仕事をしている時間と太陽が出ている時間は同じだという。だから夏場には日が昇る午前3時に起きて収穫をはじめいつぼう、冬場は暗くなつてしまう午後5時には早々と作業を終えてしまうこともあるそうだ。

時期によつて生活がツネに変化しリズムが安定しない仕事。私なら心が折れてしまいそうな時間のすごしかただ。そこで羽野さんにとつて、仕事の好きなところはなにか尋ねてみた。羽野さんは、自分の思いに合う言葉を探し出すようにして、一語一語を選びながら言ってくれた。

「1日中外にいられること。毎日同じ日がないのも好きだし、五感をフルに使える仕事、それもすごく魅力的でいいな。見た状態で判断するとか、触つてとか。それを感じられるつていうのはすごく生きている感じがして、私は好きですね」

これは建物のなかで働く仕事では決して感じられないことだ。以前企業に勤めた羽野さんだからこそ、外に出てじつさいに見て感じ取ることのよさをひしひしと感じていたのだろう。

こんな時間をすごしている今、後悔することはないかがうと、ほとんどない、と晴れやかなようすで羽野さんは言った。

私は羽野さんのお話を聞いて、時間をすごすということは選択することだと思つた。自炊をするか、しないかという選択。大学に入るか、入らないかという選択。思い返せば今の自分の生活は、時間をどう使うかという選択をくり返してできていた。

選択するとき羽野さんは、後悔しないように生きていたいという、行動を決める道しるべをもつていた。今の私にそれはまだない。けれど羽野さんのように、ゆくえを示してくれる自分だけの道しるべを見つけたと思った。

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。



夜の森が楽しいわけ

北垣憲仁（本誌発行人）＝文・写真

最

初に夜の森に動物観察に入ったときの不安な気持ちは今でもはつきり覚えています。大学に入学したばかりのころで

す。昼間は遠方まではつきり見えた森が、夜になるとまるで視界が閉ざされたかのような暗闇につつまれ、現実の世界から異界へと吸い込まれていくような不安な感覚になりました。

身近に暮らすムササビや野ネズミなど哺乳類のほとんどが夜行性ということもあり、相手の暮らしのリズムにあわせて観察しようとするどうしても夜が中心となります。小型の哺乳類なら、水槽で飼育すれば観察も楽になるかもしれませんが。しかし閉ざされた狭い空間では、動物に相当なストレスを与えてしまい、行動そのものを変えてしまうことがあります。生きいきとした自然の状態をこの目で観察したい。それには動物が生活する時間と場所にあわせて会いに行く、というのが今も私の観察の基本となっています。

哺乳類の自然な姿を映像に記録しておこうと、昨年からビデオカメラを使った撮影を始めました。今年も2014年1月16日、快晴の夜、通い慣れた森に入りました。まず日没後、ほぼ定刻に出会えるムササビを撮影し、

その後、場所を移して野ネズミを観察しようというのがこの日の予定でした。

大学から車で15分ほどの距離にある今宮神社に着いたのは、あたりが薄暗くなりはじめた17時でした。この神社は県道に接し、車の往来も激しい場所です。人の暮らしのすぐそばでこうして野生のムササビが生息しているというのも不思議です。17時20分、境内のケヤキの洞からムササビが顔を出しました。顔を出してもすぐには洞から出ようとはしませんでした。顔を出してから5分ほど経って、まるで安全を確かめるかのようにあたりを十分に伺ってからより高い場所へと移動します。そして20mほど離れたスギの木に滑空しました。このときすでにあたりは夜の暗闇に包まれていました。私には懐中電灯で照らす範囲しかはつきりと見ることができませんが、ムササビは直径20cmほどのスギの木に確実に着木しました。

ムササビのつぎに、19時からアカネズミの観察と撮影に取りかかりました。今度はじつと地面を見つめます。あらかじめ倒木の下に開いた直径3cmほどの穴の前にヒマワリの種を10粒ほど置いておきました。ヒマワリの種



木の根の隙間から出てきたアカネズミ



葉が落ちた木々の間を滑空するムササビ

の匂いを察知したのか、1時間ほどすると穴からアカネズミが顔を出しました。ムササビと同じように、いきなり穴から出ようとはしません。顔を穴から出し、左右に振り、あたりを伺うしぐさをした後で、ようやくヒマワリの種をくわえて穴のなかに入ります。体を伸ばして遠くのヒマワリをくわえようとしても、尾の先を穴の縁にあて、危険があればすぐに穴に戻る姿勢は崩しません。私の目には懐中電灯なしにはほとんど何も見えない夜の森でも、動物たちは身の安全を自ら守る注意深い観察を怠ることはありません。ムササビやアカネズミたちとの出会いは、私が忘れかけているこのような感覚を呼び覚ましてくれます。

夜の森に出かけるようになって、しだいに暗闇に不安を感じることはなくなりました。もちろん野生のムササビやアカネズミたちの生きがいとした姿に出会いたいという強い想いが不安を打ち消すということもあります。が、それだけではありません。

ドイツのユクスキュル（注1）という人が書いた『生物から見た世界』（注2）という本があります。今から80年ほど前に書かれた

この本には、動物はそれぞれまったく異なる世界を見ている、ということが記されています。一例として18年間絶食しても生きていたダニが紹介されています。ダニは森の木の枝などにぶらさがり、獲物をじつと待ちます。哺乳類がやってくると、匂いに反応して落下し血液を吸うのです。ダニにとっては、私たちが見る世界ではなく、体を支える枝と、獲物となる哺乳類、そして酪酸の匂いこそが世界のすべてなのです。そう考えると、私たちと同じような目をもつムササビやアカネズミでも、見ている世界は異なるはずです。私たちの目は、夜の星を楽しめるような感覚になっ

ていていそうですが、もしその感覚がもっと低いものだったとしたら私たちには今の星はほとんど見えず、また「星」という言葉ももたなかっただろう、という研究者もいます。夜の森に暮らすムササビやアカネズミにはどのような世界が見えているのだろう。どのような星空を見ているのだろう。暗闇のなかで一緒に時間を過ごしながらも、異なる世界を見ていると考えるようになったとき、私は夜の森の森で過ごす時間が楽しくなっていたのです。

（注1）ユクスキュル：1864年～1944年。エストニアに生まれる。生物学者・哲学者

（注2）『生物から見た世界』、日高敏隆・羽田節子訳、岩波書店、2005年

おわりに

自分の知らない時間を知りたい。
そう思ったのが始まりでした。

私たちは言葉を交わしたり、
同じ場所で時間をともにしたりして
さまざまな時間のすごしかたを知りました。

好きなことを続けたい、という思いからできる暮らししかた
仲間を大切にすることから見えた、人とのつき合いしかた
お客さんへの心遣いから知った、人との繋がりを大切にする考えしかた
後悔しないように生きるための選択のしかた
それぞれ違う世界を観ている、動物たちの生きしかた

同じものは一つとしてない、
その人、その生きもののだけの時間のすごしかた。

では、彼らはどうしてそのすごしかたを選んだのでしょうか。
その答えは、彼らが積み重ねてきた時間のなかにありました。
ずっと続けてきたこと、長年のつき合い、それまでの経験

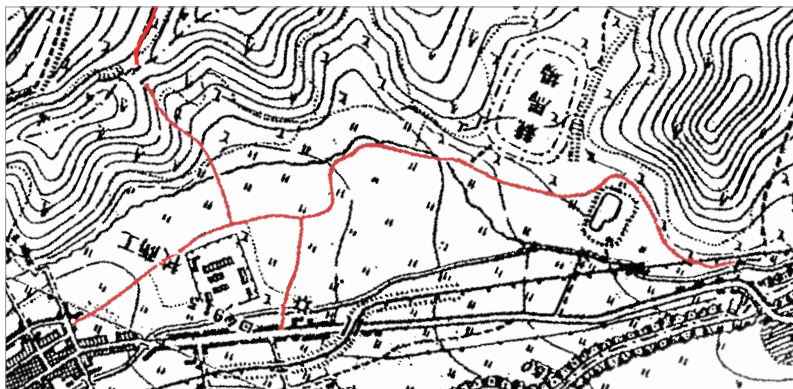
毎日の時間のすごしかたは、
それぞれの生きかたに繋がっていました。

私たちの知らなかった「都留時間」に触れる。
それは自分がこれからどのように時間をすごし、
生きていくかを考えるヒントを得ることだったのです。



記憶が描きだす 一本の道

大学周辺の
街の歴史



昭和7年発行の地図。記録されている道に赤で彩色を施した。競馬場と記されたところが現在大学のあるあたり

昭和7年発行の地図に記録されている一本の道。蛇行しながら水田地帯を横断し、谷村の町場と十日市場方面を結んでいる。現行の地図には見当たらないこの道の現状を、新旧の地図と、地域の人の記憶を頼りに探った。

牛丸景太（国文学科4年） 文・写真

以

前から、この道が通っていた場所を確かめたいと思っていた。けれどそれにいたる強い動機がなかった。むかしの道を調べあげて何かよいこともあるのか。その答えを持ち合わせていなかったのだ。

しかし、建築家・芦原義信氏の著書『街並みの美学』（岩波書店、2001年）を読んだことが、私を道探しの実地踏査へ駆り立てた。同書につきのような一文がある。

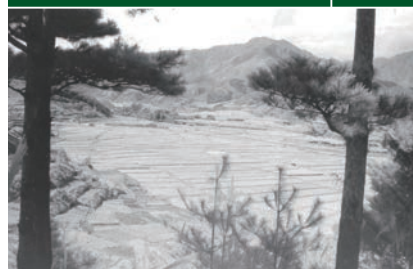
「わが国の都市の成立は基本的に田圃とあぜ道との関係にあり、人が歩いて道になるという自然発生的村落形態の延長である」

学生用のアパートやマンションが軒を争い、商業施設が建ち並ぶ現在の大学周辺の街は、50年ほど前は一面の水田地帯であった。そのことは、これまでに多くの市民の方々に教えてもらっていた。

もし、未来の人が街の生い立ちを知りたい

と思ったとき、遡れば芦原氏のいう「田圃とあぜ道との関係」に行きつくことになるだろう。当時のことが忘れ去られてしまう前にその「あぜ道」が通っていた場所を特定し、街の記録として残しておきたい。そう思った私は、1月28日午後、筆記用具とカメラと新旧の2枚の地図をもって街へ繰り出した。

まずは古地図を参考に、大学の北西にある滝下浄水場の裏に向かった。ここは、いまでも比較的田んぼが多くつくられている場所だ。最近では休耕田が目立ってきたけれど、石積みの水路や舗装されていない道が残っている。おそらく、道は往時とほとんど変わらない姿を留めているとみてよい。目の前に伸びるゆるやかなカーブが、古地図のものと一致する①。

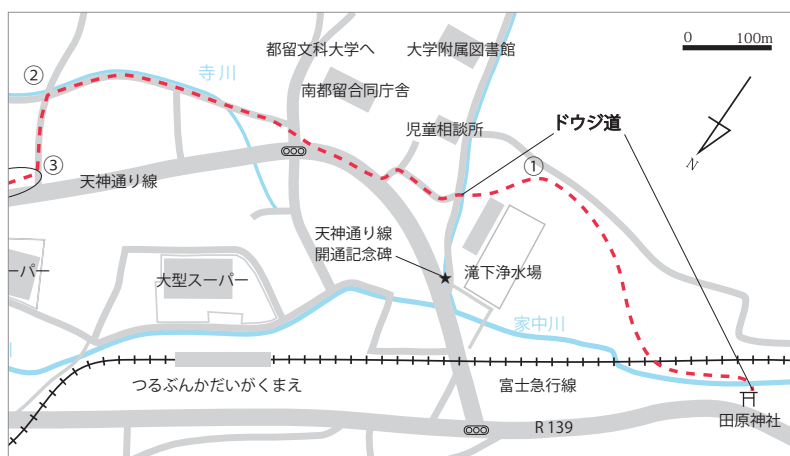


「ドウジ道っちゅうだよ」

「みんなドウジ道つちゆうだよ。いまでも年寄りには通じるよ」

「ここら（の田んぼ）は十日市場の人が多くもつてた。大学に入っていく道があるじゃん。その下が小野とかの人がもつてた」「山を越してきた。馬を引いてきた。自動車なんてにやあだから（ないんだから）」

一枚一枚に区切られた数多くの田んぼ。それらは持ち主の住んでいる地域によつてまとまりがあつた。小野といへば、大学とは山を挟んで反対側にある地区。小野の人たちは元



①ドウジ道



②曲がり角

坂の水道橋（通称“ピーヤ”）のところを越え、田んぼをつくりにきていたそう。その道は古地図にも確かに記録されている。道探しは順調にスタートした。

歩を進めて大学前の交差点まできた。一部はバイパス（天神通り線）と重なっているようだが、ふたたび小路に入る。寺川という水路が並走し、学生用のアパートが多く軒を連ねている通りだ。古地図上では、この先で大きなカーブが2度つづいている。その場所はいまのどこか、新旧2枚を見比べながら探していく。

山の等高線を参考に、それと思しき曲がり角に見当をつけた(②)。しかし、いまひとつ自信がもてない。事実を確かめるべく、近くのお宅で尋ねてみることにする。

自転車でも元坂を越えてきた

教えてくださったのは小林千春さん（52）。
子どもころの話を聞かせていただいた。小
林さんの家は、もともと元坂の向こうにある
緑町にあった。現在お宅が建っている場所は
もとは田んぼで、街ができてつあった30年く
らい前まで稲作をしていた。

記憶が描きだす
一本の道

小学校のころには、じつさいに元坂の水道橋の下を自転車で越えてきたことがあるという。寺川沿いの道はその当時からすであつて、リアカーが一台通れるくらいの細いものだった。古地図にある曲がり角はどうやら見当をつけた場所であつていようだ。

当時はまだ寺川が護岸工事されておらず、金魚鉢に入れるバイカモがよく採れた。川辺にはホタルがたくさんいて見事だったという。「懐かしいなあ」とつぶやきながら語る小林さん。その言葉に耳を傾けていると、モノクロ写真でしか知りえなかった当時の光景に色が添えられていくような気がした。

消えた道筋

小林さんのもとをあとにし、次の曲がり角を
目指すが、どうにも場所が特定できない
③。バイパスと重なっているのか、それと
もバイパス沿いに並ぶお店や事務所の敷地にな
っているのか。一軒のお店のかたにお話を
うかがうも、地元の人ではないのでわからな
いとのこと。ここはひとまずおいて先に進む。
ややくだつた交差点のところに、それらしい
小路の入口がある。付近には現役の田んぼが



元坂の水道橋



③ 廃道になっている箇所



数枚。むかしの道の一部とみてよきそうだ。
しばらくこの小路を進んでいく。

ふたたび道が消滅している場所に行きあたった。谷村工業高校（古地図では工商校）を目印に新旧2枚を照らし合わせると、道は飲食店の下を通過していることになる。本来道が通っていたであろう場所には、小さな水路の側溝があり、水が細々と流れくだっている。ここに道があつたときの名残だろうか。水路を延長していけば、バイパスを挟んで高校側の小路にうまく接続する。

「風が吹くと恐ろしかった」

バイパスを渡って高校のグラウンドを横目に歩いていく④。高校や町場との位置関係、道幅などからして探している道の一部に間違いない。住宅街を眺めながら道なりに進み、最終的に金山神社の参道に行きついた。このまま参道を横切っていけば谷村の中心地へ行きつく。十字路の角にあるお宅を訪ねて聞き込みをしてみよう。

家にあげていただき、藤本守男さん（87）
ふじもと もりお
 京子さん（81）夫妻にお話を聞く。藤本家は
きょうこ さん
 もともと谷村の街なかのほうに家を構えてい

*天神通り線……昭和40年着工、同43年完成。開通記念碑には「開通にあたり美田沃土にかわる都留文科大学の偉容 連接する家屋を一直線に縫う街路 上谷地区の発展は往時を顧みて感無量である」と刻まれている



④谷村工業高校横



⑤金山神社参道との合流点

だが、昭和7年にいまのお宅に移ってきた。当時は高校（工商校）とお宅の間に家は軒もなく、平地を吹きぬける風を真正面に受けていたという。風が吹くとグラウンドから砂埃が飛んできてかなり苦労した、と守男さんが笑う。京子さんは「廊下が砂でざらざらして大変、風が吹くと恐ろしかった」と当時を振り返った。

本題の道は、さきの小林さん同様、リアカーが一台通るくらいの幅だったと守男さん。脇に水路（小川）が流れ、子どものころには「魚もけつこう捕った」という。夏になると、ホタルやオニヤンマがよく家の庭先までやってきた。家のなかには川風が上がってきても涼しかったそうだ。その水路はのちに道路拡張のため暗渠^{あんきよ}となり、姿を潜めた。飲食店

の敷地を流れていた水路はちょうどその上流部にあたる。やはり往時の面影を伝えるものだったようだ。

「むかしは菅野とか小野とかの人が地主さんから借りてつくっていてね、農地解放になって、家をつくったりアパートを建てたりして、街が新しくできたのね。文大（都留文科大学）ができて開けてきたっていうのかしら」「さま変わりしたね。友達と『別の街にきたような感じがするねえ』なんて話もするね」

「いま思うと夢のようだ」。ゆつくりとした口調でそう話す京子さんの言葉が、景観の急激な変化を一言で表現しえているように思えた。

藤本さんのもとを辞し、帰路につく。すでに日も暮れて街灯がともっている。途中、あそここの家のおじいさんに聞いてみるとよいと教えられ、安富^{やすとみ}藤男^{ふみお}さん（79）のお宅を訪ねた。事情を説明し、私が判断に困った場所の道筋について教えていただく。道が消えていた箇所はいずれも、バイパスの開通後に建物の敷地に変わっていたようだ。こうして、断片的に残るむかしの道は、新しい地図の上で一本につながった。

* * *

古地図には書かれていないが、水田地帯にはほかにも何本も道が存在した。取材させていただいた人の多くがそう証言している。近代の地図や写真でも、拾いきれない情報が少なからずあるのだ。そうした取りこぼしを補うには、やはり当時を知る人からじかに話を聞くのがよい。人の記憶はときに曖昧さや錯誤を含むこともある。けれど、複数の人に話を聞けば、わずかなずれはおのずと^{あぶ}炙りだされ、修正されていく。そして同じ証言を集めるうちに、確実にいえそうなのが輪郭をもって浮かびあがってくる。

元坂の水道橋の下を人が頻繁に往来していたという話、きれいな小川の流れに親しんだ経験、夏の夜に見た蛍火の美しい光景……。どれもが、それを語る人がじつさいに目の当たりにした事実であり、個人の思い出という枠を越えて鮮やかに描きだされた史実として受け取ることができる。私は本や資料によらず、地域の人の記憶から直接、大学周辺の街の歴史を学んだ。

*取材にさいしては、ご紹介できなかった方々にも聞き取りさせていただきました。ありがとうございました。



これまでの聞き取りのなかで、遠藤静江さん（81）はたくさん人と出会い、多くのことをしてきたというお話をうかがってきました。最終回となる今回は、そんな遠藤さんが考えてきた「人との関わりかた」とはどのようなものなのか、教員のころを振り返りながらお話をさせていただきました。

どもたちと関わるときは、「自分は先生です」っていうよりも、子どもと

「先生、学校つて（給食や行事以外で食べたものを）食べちゃいけないでしょ。いいな、先生ばっか食べて」って言った。

体験から学ぶ

そのことから、食べることを生活のなかへ入れたと思うたの。それで誕生会をしようって言って、誕生会のときに手づくりの蒸しパンをつくる。そして、お誕生会の催しものしたあとそれを食べる。そういうことって、

をしたあとそれを食べる。そういうことって、学校でただ単に、ポケットから出してものを食べるとかっていうわけじゃない。行事の一回として誕生会のなかでやるからいいわけ。蒸しパンをつくるときなんか家庭科室でみ

認め合う環境

親に対しては厳しかったのね。親だつて、子どもたちとこれから新しい経験をしてい

くわけでしょ。親業（子育て）ってどこでも習ってないことだから、やっぱり勉強していかなきや、子どもについていけないよって。ただ、その教科がわかるとかが問題じゃなくて、子どもの発達に繋がっていくには、自分たちもそれを理解していかなければいけない。

それで、お母さんたちに「なんか書こう。でも一年かけてやるんだよ」って言って紙を渡しておく。とにかく子どもたちの成長に関わることを書こうって。そしたら生まれたときの苦労とか、さまざまなことを親が書く。そういう話は断片的に子どもに（話を）しても、子どもの記憶に残るほどではない。だからそういうのを書くと、大きくなる過程で子どもがそれを見て、絶対、親っているのはこういうものなのかって理解してくれるよって。

学級のなかで一番先に書いてきた人がいると、親同士があんたは字が上手いからいいねとか、あんたは文が書けるからいいねって言う。だけどそういうことは言いっこなし。もし、仮に言う人があっても知らん顔して書けば、それが書いてある人の人格にな

る。そうすると、親の妙な競争がなくなつて、みんな認め合うようになる。それでそうなたときにこのクラスはよくなるんだよって。こんなふうにして、子どもの成長に関わりながら親と関わっていくの。

誰だつて自分の子どもはよくしたいって言うでしょ。でも、このクラス37人いれば37人の子どもがみんながよくならないと、自分の子どももよくならないよって言うの。それには、みんなのお母さんが力を合わせて環境をつくっていくんだよって。

自分の子とか、親同士の競い合いとかじゃなくて、みんなでやっていこうということころにもつていく。そういう親とは最後まで離れがたいものね。

地域が動く

地域っていうのはPTAだよ。その人たちも、子どもとの関わりとかを学級だよりなどで出すことで、それを見た親が地域のなかで、この先生はどういう先生かと理解してくれるようになると思うの。

たとえば、低鉄棒が（小学校で）非常に少

なかったの。これじゃあ困るって。そしたらPTAが教育委員会に言いに行ってくれた。そして、教育委員会をつくってはあげられないけど、材料は買ってあげられるから、PTAの勤労奉仕でしなさいって言った。それで、すぐPTAの人たちが低鉄棒つくってくれた。



教育っていうのは、子どもを中心に置きながら学級とか地域とかみんなでそういうふうにしていく。そのことがものすごく大切で、そのためにどうしたらいいのかを考えながら関わりかたをしてきた。

だから、私が得するわけでも、誰が得するわけでもない。子どもの成長に関わって、みんなが力を出し合うっていう体制をつくっていくの。

これまでの聞き取り日				
最終回	9回	7~8回	6回	5回
2014年 2月1日	10月 27日	4月 22日	2013年 2月13日	11月 7日
			2012年 7月22日	2011年 11月8日



拝啓 遠藤先生

「何も無いところからつくりますことが好きなの」。
 80歳を過ぎても元気に満ち溢れている遠藤さん。ま
 わりの人は遠藤さんを「遠藤先生」と呼び、慕って
 いる。そんな遠藤先生の魅力や元気の源はどこにあ
 るのだろう。交流をしてきた2年半のあいだ、ずつ
 と気になっていたことを遠藤先生に聞いてみた。

前澤志依（国文学科4年） 文・写真

作品をつくる力

「何かをやるときに一人じゃできないよ」。遠藤先生はよくそうおっしゃる。具体的に示すなら、「都留詩友会」がまさに言葉通りの会だ。初めて遠藤先生からお話をうかがった翌週から、私は「都留詩友会」の会員になった。現在、会には一般のかた10名、学生12名が会員として参加している。

2012年10月19〜21日と翌年10月18〜20日に、ふるさと会館で開催された「都留詩友会 詩画展」で、私は会員として作品を出展した。両腕を広げたくらいのサイズのパネルと会員全員で共通のテーマの詩をつくり、展示する。一枚つくるだけでもかなりの時間と体力が必要で、もう一枚つくるぞという気にはなかなかない。しかし、遠藤先生は毎年、一日で四枚ほどのパネルを完成させる。「四枚書くときはね、自分の体調がよくて、やる気がうんと出てるか、気分が高揚してきているか。そういう総合的にここぞつという日を狙うわけ。不思議だよ、字つていうのは全部出るのよ、自分の気持ちが。そのあいだは

もう無心に書いてちょう」

そんな遠藤先生の作品は毎回、筆に力が込められていて、圧倒される。ほかの会員のかたも、私には考えもつかない書きかたの工夫をしている作品をつくり出す。出展する数や形は違っても、一人ひとりのやる気が作品から伝わってきて、私も負けられないなと思う。だから私は詩画展が毎年楽しみだった。

「都留詩友会」はもうすぐ40周年を迎える。こんなにも続けてきた理由をうかがうと「会があるってことは、約束ごとがあるわけだしよ。やっぱり約束をするから作品が出てくるね」との答えが返ってくる。一緒にやりた



「都留詩友会」の定例会。この日は『詩誌 樹』に載せる原稿（ゲラ）に誤字脱字がないかをチェックした（2012. 01. 18）



詩画展の共通作品。昨年のテーマは「日常で愛用しているもの」。その「もの」と詩を展示した（2013. 10. 20）

い仲間がいて、そのなかでの約束ごとに沿ってやってみよう、やりたいという思いが遠藤先生の「都留詩友会」を続ける理由の根本にある。その思いはきつと、会員全員もおなじだろう。その思いがあるから、詩画展でも毎年気合いがこもった作品が次々に出るのだ。

年齢制限なし

「なんでもやろうと思ったときが吉日。延ばしたら損する。なんでも年齢制限なし」。そうおっしゃる遠藤先生は、70歳のころから「和服リフォーム」の講座をはじめた。遠藤先生のお宅にうかがうたびに、新しくつくられた「和服リフォーム」の服が部屋にずらりと並んでいるのを私は幾度となく見てきた。講座でつくった作品は、ミュージアム都留で開催する「和服リフォーム展」で展示され



ファッションショーのようす。遠藤先生の司会に合わせて、モデルが次々に登場する (2012. 06. 03)

る。私は2011年7月3日と翌年6月3日に、展示会の企画のひとつでもあったファッションショーを見に行った。企画は毎年大盛況で、会場にいる誰もが「和服リフォーム」に夢中になっていた。

「和服リフォーム」を続けている理由として、遠藤先生があるお話をしてくださった。

10年ほど前、ファッションショーをはじめた当初、モデルとして参加された73歳のかたが、ご主人に「そんなしわくしやで腰が曲がつてみつともないから、参加しないほうがいい」と言われたことがあった。そのかたはそれが理由で参加を辞退しようとしたが、遠藤先生は「腰が曲がつたらみんな裸で歩いてる？ みんな着物着てるじゃん。だからいい

んじゃない。ファッションショーはきれいな八等身の若い人がやるだけじゃないから」と励まし、そのかたは参加されたそう。そして展示会が終わったあとの反省会で、そのかたは「私は73年生きてきて、こんな楽しいことはなかった」とおっしゃったという。

「それが私の一番のきっかけ。やった結果が、人が喜んでくれたり、生きがいになってくれたりしたのがすごくうれしいよね。だからこれは、やめられないなと思った」

人とのつながりを大切にしたいという遠藤先生の思いが、さらに「和服リフォーム」を盛り上げていくことにもつながっている。

「環境」をつくる

遠藤先生の元気の源はどこにあるのかとうかがったとき、「環境」という答えが返ってきた。「自分を取り巻いているなかに、自分の興味があるものや憧れ、やりたいことがまわりにあるっていうこと」。それが遠藤先生の言う「環境」だ。遠藤先生のまわりはそういった「環境」で溢れている。それは、偶然まわりにあったからではなく、遠藤先生が自

分で行動してつくりだしているからだと思う。「自分で身につけたものは、誰ももっていかないから盗られないよ」と遠藤先生のお母さんは口癖のように言っていたとのこと。それなら使わなければもったいないと考える遠藤先生は、自分が身につけた技術や、人の関わりかたをいつでもどこでも活かしているのだ。そうして自分からやりたいと思える「環境」をどんどん広げていく。

でも、ただ「環境」をつくれればいいというわけでもないらしい。

「入り込むと飽きるの。それで挫折するよね。それがふつう。その挫折を乗り越えらるっておもしろい。ハマるっていうの。で、おもしろくなると上手になる」



「和服リフォーム」講座のようす。遠藤先生が服の型紙を描くときのアドバイスをされている (2014. 01. 27)

明治生まれの着物は
かたちを整えているときは
シャンとして健気に見える

縫い糸を引き抜いて解いてみると
大分くたびれている
天にかざし陽に透かすと
縫い糸が支えていた背縫いは
折り目にそってすり切れている

……(略)……

生き残った端裂に目をかけてやる
アイデアが手をつなぎ
楽しく躍り出る
小袋を縫う

「ワァーかわいい」

ボシエットを縫う

「ワァー素敵だ」

生まれ出た喜びが
小物たちに満ちて

まわりの人間を活気づけてくれる

眼鏡ケース

ブックカバーなどなど

生き残りをかけた端裂から
いい顔をして続々誕生するものたち

さてこのエネルギーはどこからくるのだろう
わからない
算盤にのっからないものが
体の内外に充滿してくる



——「新生」遠藤静江・作 詩誌『樹』250号より



自分が、その環境のなかでどれほど真剣に
向き合い、壁にぶつかっても乗り越えたいと
思うか。遠藤先生はその「ハマル瞬間」を何
度も経験してきているから、いつでも真つ直
ぐな姿勢で相手にぶつかり、なんでもとこと
んやろうとする。私にはそんなふうに見えた。
なぜ私は遠藤先生に惹かれたのか。それは遠
藤先生がつくりだす「環境」に憧れたからだ。

いつだって遠藤先生の背筋はピンとしてい
て、笑顔が絶えない。遠藤先生の姿を見てい
ると私もやる気をもらう。「どうしてこんな
に先生からパワーをもらえるんですかね」と、
私はお話しているなかでふと聞いてみた。

「情熱がほとばしるように伝えれば、それに
触発されるよね。みんなを引き込むような眼
の輝き。みんなを反応させるように自分が表
情や感情をもつ。そのためには毎日みずみず
しく生きなくちゃいけない。感動しなきゃい
けない。見たり、聞いたりしてそういう機会
に多く触れることが大事」

遠藤先生はいつでも何かに夢中になってい
る。話するときの表情で楽しかったとか、大変
だったとかの気持ちも伝わる。私はいつも、

そんなふうに生きている遠藤先生の「みずみ
ずしさ」に刺激を受けていた。

「行^こうに小路^{みち}を行^こかず」。遠藤先生が教員に
なつて間もないころ、校長先生から贈られた
言葉だそう。遠藤先生は今もその言葉を大切
にして生活している。何事も真正面から向き
合うことが遠藤先生のポリシーだ。毎日をた
だなんとなく過^くすのではなく、目的をもつ
て過^くす。そうすると遠藤先生のようにみず
みずしく生きていけるのかもしれない。自分
がやりたいと思つたことは出し惜しみせず、
毎日を全力で生きる。それが遠藤先生の元氣
の源であり、すてきな魅力でもある。

「遠藤先生の夢^{ゆめ}ってなんですか」。そんな質
問をしたことがある。

「夢^{ゆめ}っていうのは……。いかに死ぬかつてい
うことは、いかに生きるかつていうことだ
な。っていうのがよくわかつてきたのね。枕元で
チンと鳴つたとき(寿命をむかえたとき)、自分
が、ああ、これで私の一生はよかつたんだっ
て言えるかどうか、それが最大の夢だよ」

私も遠藤先生のように生きたい。そのため
にもつとお話を聞きたい。そう思つたから私
は、遠藤先生のところへ通い続けていたのだ。

フィールド・ミュージアム



クマ棚

2014年2月6日 都留市十日市場
クマ棚は、樹上でツキノワグマが食事をした痕です。

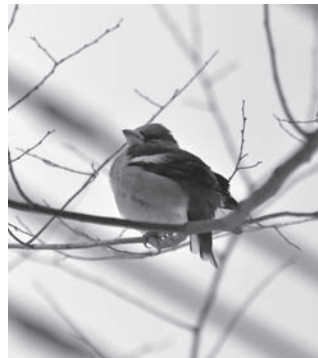
落葉広葉樹の葉が落ち、静まり返った山。
夏や秋のような賑わいはありません。
こんな時季だからこそ、
気づくフィールドサインがあります。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



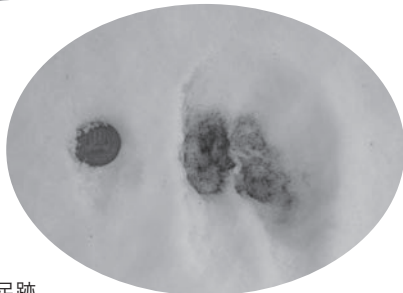
クワコの繭

2014年2月5日 都留市十日市場
クワの枝にクワコの繭がついていました。クワコから養蚕用のカイコが作られたそうです。



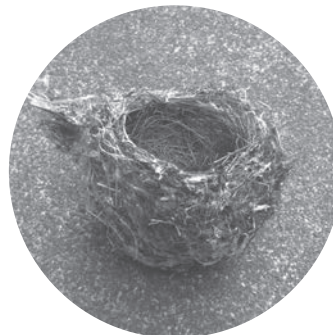
シメ

2014年2月11日 都留市田原
都留市では冬鳥です。樹上や地上で、植物の種をよく食べます。



ニホンジカの足跡

2014年2月5日 都留市十日市場
雪の上に残されたニホンジカの足跡。10円玉2個分くらいの長さでした。まだ子どもでしょうか。



メジロの古巣

2014年1月14日 都留市田原
強風で落ちたと思われる古巣です。コケやシュロ、クモの巣などが使われています。



フクジュソウの花

2014年2月8日 都留市大幡
まだまだ寒い日が続きますが、もう花を咲かせている植物もあります。



オナガガモ

2014年1月29日 都留市川茂
都留市では珍しいオナガガモがいました。市内では過去8年間に数回の記録しかありません。

センサーカメラが写した動物たち

都留文科大学フィールド・ミュージアムでは、市内にセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。ここでは、2013年12月に都留市上谷（大学周辺）で撮影された動物を紹介します。



テン 2013年12月4日
鮮やかな冬毛のテンが撮影されました。本学裏山の遊歩道では、テンのフンをよく見かけます。



ノウサギ 2013年12月2日
倒木の上を移動するノウサギ。このような倒木は、リスやテンもよく利用します。



タヌキ 2013年12月7日
健康な冬のタヌキは夏よりも太っていて、毛並みのすばらしさが目を引きます。



ニホンジカ 2013年12月6日
オスのニホンジカ。立派な角をもったオスに山で出会えたら、幸運ですね。



キツネ 2013年12月11日
犬よりも太く、しっかりとしたやや長めの尻尾がキツネの特徴です。



ハクビシン 2013年12月8日
ハクビシンは、タヌキやニホンジカのようにいつも写る動物ではありません。

フィールド・ミュージアムのたのしみ

フィールドで見たものを記録に残すためにメモをします。
メモは、当時のようすを後で振り返るためのもの。
記録をたぐることで見えてくるものがあります。

西教生（本学非常勤講師）＝文・写真

のちの疑問に答えるメモ



2009年1月から都留市川茂で見られるようになったオオバン

野

外で生きものを観察しているとき、いろいろな記録を残そうとメモを取ります。いつ、どんな花が咲いていたとか、どんな木の実を見つけたとか。私の場合は、どこでどんな種類の鳥を見たのか、何羽ぐらいいて、どういう行動をとっていたのかをよくメモします。また、その生きものを見て、自分がどのように感じたのかも書いておきます。観察したことをもつと詳しく記述するときもありますが、このような簡単な記録でも残しておく、後で振り返って調べることができます。当然のことながら、メモをしておかないと時間をさかのぼって記録にあたることはできません。

初めて訪れる場所では、ふだん見慣れた鳥についてもきちんと記録をするようにしています。土地勘のない場所は、いつも見ている鳥がふつうにいるのか、それとも稀にしか見られないものなのか、わからないからです。たとえば、都留市ではツバメは夏鳥ですが、沖縄県では渡りの時期にしか見られません。コムクドリは都留市では渡りの時期にしか観察できませんが、富士山麓では夏鳥です。サンコウチョウやサシバは本州で見られる鳥で

すが、北海道には生息していません。どこにどんな生きものがいるのか、それを自身の目で確認していくとき、やはりメモは欠かせません。

いなくなったカイツブリ

山や水辺を散策し、そこで観察した生きものをメモすることのほかに、ある場所では定期的に特定の生きものを記録しています。私は2005年の8月からほぼ毎月、都留市川茂で水鳥の種類と数を記録しているのですが、最近こんなことがありました。川茂では一年中生息しているカイツブリが、2013年12月から見られなくなったのです。気に



カイツブリ。潜水をして食物を取ります

なつて過去の記録を見ると、2013年6月まではほとんど毎月観察されています。いまのところ、カイツブリがどうしていなくなったのかはわかりません。春から、また以前のように見られるようになるかもしれません。が、いったいどうしたのでしょうか。水鳥の生息している環境に何か変化があったのでしょうか。

そこで、カイツブリ以外の水鳥というと同じように一年中生息しているカルガモには、大きな数の変化はありませんでした。ほかの水鳥の記録にも目を通すと、2007年12月からヒドリガモが少なくなっています。もともと、数の多い鳥ではありませんでしたが、最近ではほとんど見られません。いつば



カルガモ。水面で食物を取ることがほとんどですが、まれに数メートル潜水して川底の植物を食べることもあります

う、2009年1月からオオバンが出現するようになり、それ以降は毎年秋から春にかけて観察されています。2009年9月からはオナガガモが観察されるようになりました。

疑問に答える記録

ある場所で水鳥の種類と数を書き留めておくだけで、今年は「多い」とか「少ない」とか、「例年並み」などということがわかってきます。簡単な記録でもそれを積み重ねていくと、のちに思いつく疑問に答えられるかもしれません。後で振り返って調べることができるよう、いろいろな記録を残す必要があります。

ところで、積雪の量や気温は水鳥の数に影響を与えると考えられています。積雪が多かったり、気温が低くて水が凍ったりすると、食物を取れなくなるからです。このような気象条件のとき、彼らはどんな行動をとるのでしょうか。その行動を捉えるためにも、また、地球規模での気候変動が身近な生きものの振る舞いにどのように関係するのかを明らかにするためにも、日常の記録が大切になります。

ふくらすずめの越冬

「ふくらすずめ」とは、寒さのために羽毛を立ててまんまるに膨らんだスズメのこと。羽毛を立てることで熱を逃がさないようにするのだ。寒い時季に見られるため、冬の季語でもある。スズメがそんなようすを見せると知った私は、この冬、彼らを追ってみることにした。

別符沙都樹（国文学科2年） 文・写真





左：ふくらすずめの状態のスズメ
右：暖かいときのふだんのスズメ

ふくらすずめを見ようとしても、最初はどれがふくらすずめなのか分からなかった。というのも、じっくり見たくてもそれが叶わないのだ。スズメ自体は毎日目にするものの、近づくたびに飛び立ってしまい、一箇所に留まることがまずない。それでも毎日意識するうちに、目で追うことに慣れてきて、膨らんでいるのかどうかが見えてくるようになった。

ふくらすずめの姿は、首が羽毛に埋まり着膨れしたかのよう。遠目でも目を凝らせば、ふわふわと立った羽毛が、風になびいて小刻みに震えているのがぼんやりと分かる。気づいていなかっただけで、この時季ふくらすずめは何度も目にする機会があるものだった。電線に、木陰に、落ち葉の上に。気づけばどこからともなく高いさえずりが聞こえ、忙しく飛び交っている。

ここからがふくらすずめだという基準は明確に決めようがないだろう。それでも何羽も見えていくうちに、臃^{おぼろ}げに「ふくらすずめだ」と感じる時と感じないときの基準が、自分のなかにできつつあるのを自覚していった。

彼らは冬だからといって、いつでもまああるくふわふわとしているわけではなさそうだ。雪が降ったつぎの日でも羽毛を膨らませないことがある。風の強さや日差しの暖かさを含め、私が寒いと感じるときにはふくらすずめを目にするが、さして寒さを感じないときにはあまり見かけない。彼らが羽毛を膨らませるかどうかの境目は、私たちが寒いと感ずるかどうかと近いところにあるのかもしれない。種^{しゅ}やかたちは違えど、同じ感覚を共有しているようでぐつと近い存在に感じた。

ふくらすずめを見かけるたびに

「そうだ、確かに今日は寒いよなあ」としみじみ思うようになった。最初は見たいがために追っていたけれど、探す存在というよりは寒さをはかる、存在になったのだ。はかるといっても、温度計の目盛のように具体的な数値を見てはかるものではない。風の強さ、日差しの暖かさなどを含めた、いかなれば「自然の温度計」のようなものだ。

寒さで街全体がしんと息を潜めるようにしている分、スズメの動きが際立って感じられるのだろうか。そんな日でも、彼らは変わらずあつちこつち忙しそうに飛び回り、雪の降ったつぎの日には、さらにはしゃいでいるようでさえある。彼らは小さなからだを目一杯大きくして、縮こまっているものたちを励ましているかのよう。そんな彼らのささやかな応援に、これから毎年元気づけてもらえそうだ。



冬芽と待つ春

冬芽は、葉の落ち出す秋からでき、冬を越え春になると花や葉へと生長する木の芽のこと。冬芽は、それぞれの木ごとにいろいろな姿を見せてくれる。そんな冬芽を探しに、都留を歩いた。

金原由佳（社会学科1年）＝文・写真

今

まで、冬芽という存在を知ってはいても、注意して観察したことがなかった。けれど、ある日何気なしに大学に植えられているヤエザクラとシダレザクラの冬芽を見比べて驚いた。一見すると同じような色形なのに、シダレザクラの冬芽には毛が生えていたのだ。じっくり見てみると、似たようなものだと思っていたものにも違いがある。そう気づくとほかの木々の冬芽もどんな姿をしているのか気になり、探してみることにした。

再発見と新発見

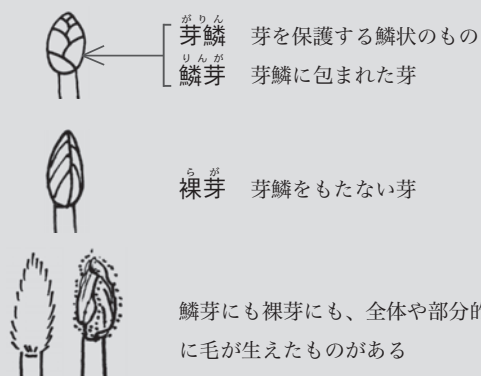
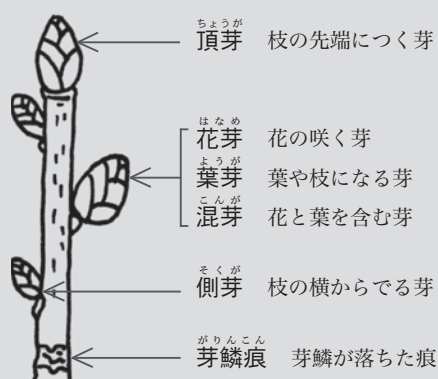
冬芽を気にして歩くと、なぜ今まで気づかなかったのかと思うくらい、いろいろな冬芽が目にとまるようになった。魚の鱗うろこのような芽鱗がらみんと呼ばれる外皮に覆われた姿や、芽の表面に毛が生えている姿など、どれも個性的だ。なかでも、私が驚いたのはアジサイとフサザクラだ。

アジサイは自分の家の近くにも植えられていて、見慣れたものだった。けれど、冬芽の姿はどんなふうだろう、となると答えられない。冬芽があるものなのかどうかさえはつきりとは思いつけなかった。そこで、あらため

てアジサイを見てみると、ちゃんと冬芽があった。枝先の冬芽（頂芽）は芽鱗をもたない裸芽で、何枚もの葉の芽が重なって小さな白菜のような形だ。でも枝の横の冬芽（側芽）には薄い芽鱗がある。一本の枝のなかでも違う姿の冬芽があることに驚いた。ふだん見慣れている木の新たな一面に、私は自分が「見ているつもり」になつていただけだったと気づいた。

いっぽう、冬芽から木を知ったのがフサザクラだ。都留市上谷の桂川沿いにあった木で、1cmほどのまるまるとした卵形の冬芽を見たとき、私は思わず「タコだ」と口にだしてしまった。その冬芽の下には放射状に、細い枝のようなものがくっついていて、まるで足を広げたタコのように見えたのだ。今までそんな姿の冬芽は見たことがなく、木の名前もわからなかった。手がかりはタコのような姿の冬芽。さっそく図鑑で似た冬芽を探した。けれど、なかなかこれといったものが見つからない。姿が似ているものを見つけても、それがほんとうにその冬芽のものか確信がもてなかった。何度もその木へ通い、芽鱗の枚数を数えたり、冬芽の生えかたを調べたりした。

【冬芽の名称】



【冬芽いろいろ】



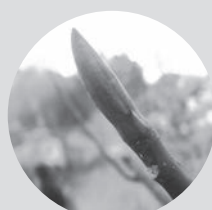
ヤエザクラ (2014.1.14)
田原 本学校庭
頂芽が2〜3つほど並んで生えるのが特徴。



シダレザクラ (2014.1.14)
田原 本学4号館前
芽鱗のふちに沿って白っぽく短い毛が生える。



アジサイ (2014.1.28)
田原 本学入口
頂芽は初め鱗芽だが、生長中に芽鱗が落ちて裸芽になる。



ホオノキ (2014.1.28)
田原 附属図書館ビオトープ
2枚の大きな芽鱗をもつ。手触りはなめした革のよう。



ハクモクレン (2014.1.28)
田原 本学自然科学棟前
芽鱗に黄緑色の長い毛をもつのが特徴。葉芽より花芽が大きい。



フサザクラ (2014.2.2)
都留市上谷 桂川沿い
タコの足のよう^{つか}に見えたのは種を支える柄が残ったもの。

冬芽から見えたもの

そうしてようやく、それがフサザクラのものだと確信した。

私は冬芽の姿という限られた情報からフサザクラを知ることができてとても嬉しく、新種の木を見つけたような気分になった。春になったとき、この木がどんな姿を見せてくれるのだろう。そう考えると春が来るのがいつそう楽しみになった。

アジサイもフサザクラも、自分の家の近くや通い慣れた通学路といった、ごく身近にあったものだ。それなのに、どうして今までその存在に気づかなかったのか。それは、私が身近なものをいつしか当たり前の存在として、すべて知っているような気分になっていたからだ。冬芽を気にして歩いただけで、身近な自然が発見に溢れたものに見えた。自分の視点を少し変えただけで、見えてくるものがあつた。発見はどこか遠くにしかないものではなく自分の身の周りにもあるのだ。それを忘れず、身近な自然に目を向けていきたい。

【参考書籍】

馬場多久男『冬芽でわかる落葉樹』、信濃毎日新聞社、1996年

時の歩みかた



『フィールド・ノート』は今年度で11周年を迎えました。「11年間」を長いと思う人、あっという間だと思う人……時間の重さは人によって違います。この11年間でどう歩んできたのか。平成14年（2002年）からはじまった2つのものについてそれぞれお話をうかがいました。

前澤志依（国文学科4年）＝文



「第12回 市民俳句かるた大会」。今年は1月18日に開催（撮影：板津松男氏）

平成14年度に都留市俳句連盟が30周年を迎えた記念行事の1つとして、「市民俳句かるた大会」が開催されるようになりました。毎年1月に都留市まちづくり交流センター（旧文化会館）でおこなわれ、今年で12回目を迎えたのことに。平均年齢が60歳を越える都留市俳句連盟の方々が中心となり、有名な俳人の句を53句選び、それらをカルタにしました。カルタはすべて有志の方々の手作りだそうです。

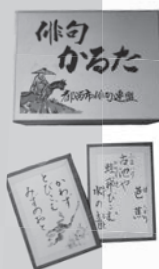
市民俳句かるた大会

2月3日、都留市俳句連盟に参加されている板津松男さんいたづまつおにお話をうかがいました。

「子どもたちに俳句を広めて、親しんでもらって、大きくなっても覚えておいてもらいたい」という俳句連盟の方々の強い思いから「市民俳句かるた大会」が始まったとおっしゃる板津さん。それから11年間、毎年欠かさずに「市民俳句かるた大会」はおこなわれています。しかし時間が経つにつれて役員の方々の高齢化が進み、継続させるのが大変になってきているのだとか。それでも、今後の目標についてうかがってみると、「子どもたちが俳句に親しむにはかるた大会が必要。だからこれからも続けていきます」とすぐに答えが返ってきました。

さらに、11年間「市民俳句かるた大会」を続けてきたことを振り返ると「俳句を地域に広げる先がけになってきている」と板津さんはおっしゃっていました。俳句連盟の方々がつくったカルタは市内の幼稚園、保育園、小学校に配られています。なかには、使い込まれてボロボロになっているカルタもあるそう。また、「市民俳句かるた大会」には毎年、幼児や小学生合わせて100人を超える子どもたちが参加しています。それほどみんなが俳句かるたに夢中になっているのでしょう。

俳句が地域に根付き、地域の人に親しみをもってもらいたいという思いからはじまった「市民俳句かるた大会」。それが、板津さんをはじめ、俳句連盟の方々が11年間続けてきたことで、地域に密着した行事になってきているようです。



00号～79号までの『フィールド・ノート』データ

- 総ページ数……3,882ページ
- 取材相手総数……665人
- 登場回数が最多の取材地域……十日市場（計101回）
- 11年間の編集部員の人数……139人

『フィールド・ノート』

11年間で『フィールド・ノート』は計80号を発行してきました。そのあいだに冊子にはどのような変化があったのか、本誌発行人である北垣憲仁さんにお話をうかがいました。

北垣さんいわく、11年の時を経て徐々に『フィールド・ノート』が、多くの人目に目を向けられるようになってきたとのこと。多くの人の目にとめてもらうには、何年もの年月を費やし、冊子と真摯に向き合う姿勢が必要です。一号一号をていねいにつくり、11年間の時間をかけて都留を見つめてきたからこそ『フィールド・ノート』を通して、読者や地域の方々との交流の輪が広がってきたのだと思います。

北垣さんに今後の目標をうかがうと、「号を競うのではなく、その号に

どれだけの時間をかけるのかが大切。みんながどれだけ時間をかけてしていくのか、地域のかたと一緒に、地域のおもしろさを見つけ出していくことをやっていきたい」とのことでした。『フィールド・ノート』に都留の魅力を記録し、みなさんと共有していく。そうすることで冊子を、時間をかけた小さな屋根のない博物館（フィールド・ミュージアム）に仕上げていくというのが、北垣さんから見た『フィールド・ノート』の今の夢だそう。

毎号楽しみにしてくれる読者の方々、励ましてくれる地域の方々とつながりが、私たち編集部員にとって活動の糧になっています。



北垣さんへの取材のようす。11年という長さについて、改めて考えることができた取材でした（2014. 02. 10）（撮影：別符沙都樹）

2002年に「地域社会と自然」をテーマに『フィールド・ノート』が発行され、変遷を経て2003年発行の16号からは「都留の自然と人との交流」をテーマに冊子はつくりだされてきました。長い年月を経てもテーマが変わらずにいられるのは、それぞれがもつ興味・関心が人によって違い、いつでも新鮮な目で都留を見ているからだと思います。これからも地域の方々と一緒に私たちが見た都留の姿を記録し、冊子としてみなさんにお届けしていきます。

最終回

北口本宮からの再出発

牛丸景太（国文学科4年）＝文・写真
『フィールド・ノート』編集部＝写真

富士道みちを歩く 2013

道歩きを先導する都留市郷土研究会の内藤恭義さん（81）は、道順通りに進むことよりも一回ごとの内容を重視された。今後は、西桂に詳しい人の参加を待ちつつ、都留市のほうへ引き返すルートをとる。北口本宮を起点に、土地の歴史や民俗を探究する旅の再出発だ。

11月16日、私たち富士道を歩く会は、「北口本宮富士浅間神社」の境内にいた。ここは当初、歩く会がゴール地点として目指していた場所だ。道順でいえば都留市のつぎは西桂町だが、案内をしていたくはずだったかたが急逝され、繰り上げで富士吉田市に集合となった。

富士道 旅録

小さな事象を見逃さない眼

北口本宮が鎮座する「諏訪の森」をまっすぐに貫き、大鳥居や社殿へといたる一筋の参道。両脇には富士講の人たちによって寄進された石灯籠が並び、整然とした美しい景観が境内の奥までつづいている。

道歩きで大切にしたいことを、この参道の石灯籠からあらためて考えた。

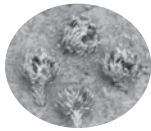


私たちがこれまでも、壊された路傍の石仏（とくに頭のとれた地蔵）をよく目にしてきた。いくら時代の潮流とはいえ、長い時間をかけて培われてきた信仰や文化的な遺産が、そのときの国の政策によって失われ



およそ130基ほどある石灯籠のひとつを指し、内藤さんが一座に注意をうながした。「何かおかしいところはありますか？」。参加者の視線は、広い森のなかの一点に集中した。

よく見ると、火袋（ひぶくろ）の下の中台ちゅうだいと呼ばれる部分に、寺院をあらわす卍まんじのマークが刻まれている。神道と仏教とを結びつける「神仏習合」が富士信仰にもおよんでいた証だ。かつては五重塔や鐘楼など、仏教色の強い堂塔が建てられていたという北口本宮。それらの建物は明治の神仏分離政策によって破却され、いまでは痕跡を残すのみとなっている。



第12回 (2013.11.16) の記録

富士道を歩く会が半年ぶりに開催された。天候不順で延期がつづいていたけれど、この日は快晴に恵まれた。

郷土研究会の方々は浅間神社のことを「お浅間さん」と呼ぶ。境内の面積は数ある浅間神社のなかで一番大きく、およそ8万㎡。「諏訪の森」と呼ばれる。諏訪という名前は、もともと諏訪明神を祀っていたことに由来。樹齢数百年におよぶスギやヒノキの大木が根を張り、あちこちにムササビの食痕（本頁左上写真）が落ちていた。



浅間神社は、富士北麓が「富士」、南麓が「富士」という表記を用いる。主祭神はいずれも木花咲耶姫命。このはなさくやひめのみこと

大鳥居（高さ約18m）は扁額に「三国第一」とあるように、木造では国内最大として知られている。このときは60年に一度の改修工事中で覆いがかけられていた。



折しも七五三のシーズン。境内は正装した親子づれで賑わい、本殿からはしきりに太鼓の音が聞こえた。

西宮の奥に進むと白木の鳥居が見えてくる。ここが富士登山の第一歩を踏み出す入口、登山口であった。道の端には富士講の人々によって建てられた石碑（霊神碑）や石像が並ぶ。



登山口の鳥居から500mほど坂道をのぼったところに大塚山がある。山といっても、こんもりと土を盛り上げた丘のようなもので、日本武尊がここから富士山を遙拝したという伝説が残る。やまとたけるのみこと

人工的なものではないかと内藤さんは考えており、「富士塚」の原型かとする説もある。

*富士塚……富士山を模して造られた人工の山や塚のこと。関東地方を中心に各地に点在している

てしまうというのは何とも悲しく恐ろしい話ではないか。

心のよりどころが強い力で変えられ、否定され、あるいは破壊されてしまった人たちは、いったいどんな心持ちだったのだろう。当時の人々の心情を思わずにはいられなかった。

北口本宮に残る卍マークが入った石灯籠は、古い時代の信仰のかたちを教え知らせてくれる。しかしそれは、ほんの少しだけ意識を働かせなければ見落としてしまうようなささやかなサインだ。まずはその存在に気づけるかが問われる。

郷土研究会の安富一夫さん（87）は、「分からないことがあつたら何でも聞いて」とよく声をかけてくださる。けれど、質問するにしても、まずは私たちが何かに着目し、問題点に気がつかないことには始まらない。

過去の痕跡から自力で歴史を読み取れるように、そして地域史に明るい方々と歩く時間をもつと豊かにするために、小さな事象を見逃さない眼を養っていきたい。卍マークを前に、そんな決意を新たにしたい。

Field・Note News 2014.1-2

編集部の活動やできごとと、大雪の被害についてお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

巣箱にカメラを設置 (1月16日)



5 mぐらいの高さに巣箱を設置した

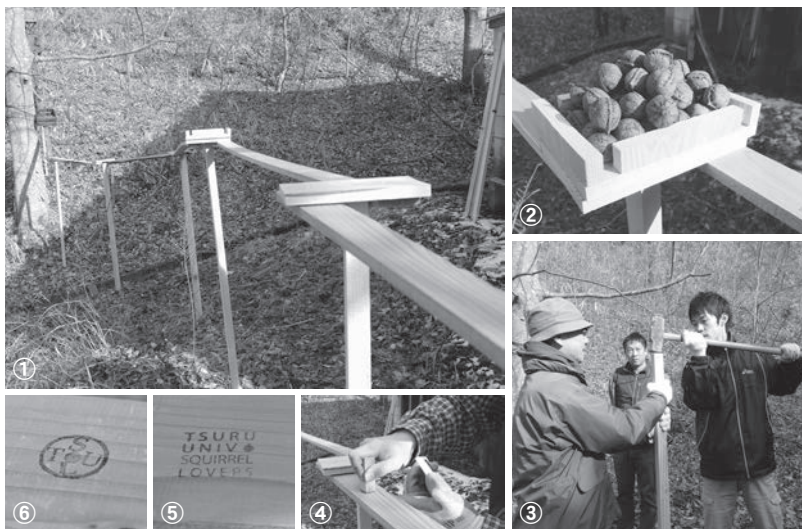
キャンパスに隣接している「ムササビの森」には、巣箱が2つかけてあります。昨年の12月、1つの巣箱にカメラを設置しました。巣箱のなかの映像は、学内にあるモニターで見ることができます(この巣箱には、まだムササビが入っていません)。今回は、2つ目の巣箱にもカメラを設置しました。こちらの巣箱はムササビが利用しているため、モニターには巣箱のなかにいるムササビが映し出されるはずです。昼間は寝ていることの多いムササビですが、どのような行動が見られるのか楽しみです。なお、巣箱のなかの映像は本学のHPからもご覧いただけます。

(西教生)

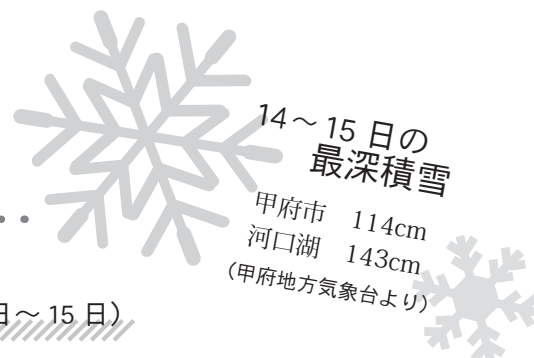
「リスの橋」づくり (1月24日)

本学美術研究棟の裏に「リスの橋」を設置しました。これは観察用のえさ台と山とを結び、キャンパスにリスを呼ぶための動線です。およそ2m間隔で杭を打ち、そこに横木を渡して固定し、中継地点と終点のえさ台にはクルミを山盛りに置きました。作業には8人が参加。1時間ほどで設置を終えました。今は葉が落ちている木々が芽吹き出すと、山のほうからこの橋は見えにくくなります。はたしてリスは橋を見つけてやって来られるのか、この冬が正念場です。

(牛丸景太)



①「リスの橋」の一部 ②橋の途中にはえさ場を数カ所設置 ③長さ 160cmほどの杭を打つ ④キャンパスにリスを呼ぶ会の2種類のスタンプ(⑤、⑥)を杭と横木に押す



14～15日の
最深積雪

甲府市 114cm
河口湖 143cm
(甲府地方気象台より)

記録的大雪 (2月8日～9日、2月14日～15日)

8日の朝から9日の未明にかけて、富士急行線 都留市駅周辺では積雪 76cm を記録しました (情報提供=遠藤静江さん)。気象庁によると、これは約 20 年ぶりの大雪とのこと。さらに、そのつぎの週の 14 日の朝から 15 日の午前 10 時ごろまでは山梨県各地で 1 m 以上の積雪を観測しました。都留市役所に都留の積雪量を伺ったところ、都留市消防署では 108cm を観測したそうです。しかし、家屋の倒壊などの被害の対策におわれたため、詳しい積雪量については不明だそうです。本学周辺では 140cm 近くの積雪を観測しています。



雪の重みでフェンスが曲がってしまっている (2014.2.22)

～交通被害と対応～



重機による雪かきが連日にわたっておこなわれた (2014.2.26)

14 日から 15 日にかけての大雪では、山梨県と他県をつなぐすべての高速道路の通行止め、鉄道運休により、山梨県全体が孤立してしまいました。都留市を通る東富士五湖道路、富士急行線も利用できませんでした。国道も除雪作業がおこなわれるまでは通行止めとなりました。道路に立ち往生する車も多々あり、16 日の 12 時半ごろには「都留文大入口」交差点から本学下の交差点までのあいだに 40 台の車が止まっていました。なお積雪の 3～4 日後には、市や自衛隊による除雪作業、市民や学生の雪かきにより国道の通行が可能になりました。

(廣瀬はづ紀)

F topics

駅の展示替えをしました (1月16日)

本学の「博物館実習」という講義で作られたパネルを富士急行線 都留文科大学前駅 駅舎に展示しました。今回のテーマはキャンパスの自然の魅力です。

新プリンター始動 (1月23日)

新しい印刷機へと替わりました。編集部員も心を入れ替え、これからも編集作業に精を出していきます。



今まで使っていた印刷機。2004 年から編集作業を支えてくれました



発行人
北垣憲仁 (18-19)
統括編集者
西教生 (12,32-35)
編集長
牛丸景太 (22-25,42-43)
前澤志依 (26-31,40-41)
副編集長
別符沙都樹 (2-3,36-37)
編集
廣瀬はづ紀 (10-11,44-45)
伊藤瑠依 (1,12,16-17,48)
加藤萌香 (13-15,20-21)
金原由佳 (4-5,38-39)
舟田早帆 (6-9,46-47)
ロゴデザイン
工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 80 号

発行日: 2014 年 3 月 26 日

発行部数: 500 部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。



編集後記

大切な時間

あ っという間に過ぎていく日常のなかで、1日に5分だけでも、その日を振り返りたいと思っています。とくに何かを考えるわけでもなく、どこを見るわけでもなく、ぼおっとして。抱えているものを忘れて。こうして思考をリセットし、つぎの日を迎えたいと思っています。つねに思っている、毎日できるわけではありませんが、今日と明日をつなぐために、1日の内の5分を、そうやって過ごすように心がけています。(西教生)

し あわせでした。と胸を張って言える4年間でした。友人と一つのものをつくりあげたり、騒いだり。本気でぶつかり合うことも幾度となくありましたが、それらも振り返れば大事な経験。多くの人と出会い、支えてもらったから今の自分がいます。月並みですが、一人ではできないことも誰かと一緒ならなんでもできることを都留で教わりました。みんなと一緒にいる時が私にとってとても刺激的でかけがえのない時間です。(前澤志依)

た びや帰省で電車を使うとき、できることなら特急に乗りたいと思っていました。ちょっぴりお金がかかるけど、なにより速くて便利。乗り心地は快適で文句はありません。しかし惜しむらくは、車窓からの風景や読書を楽しむ余裕がない。うかうかしているとあっという間に目的地に着き、ともすれば乗り過ぎてしまいそう。そのことに気がついた最近では、各駅停車でいく移動時間がまことに愛おしく、できることなら先を急がずぼつぼつ行きたいものだと思うようになりました。(牛丸景太)

次回予告

挑戦 (仮)

『フィールド・ノート』81号

2014年6月 発行予定

新しいことに挑戦する

何かに挑戦する人から学ぶ

春ははじまりの季節

さまざまな「挑戦」に迫ります

FIELD·NOTE

no. 80

発行日 2014年3月26日 (年4回発行)
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フォーランド・ミュージアム部門 『フォーランド・ノート』編集部



厳しい寒さから守るために敷かれた藁
気がつくと、にんにくにも春が来ていた

